

大谷地区の基礎的研究（４） —観光の発展プロセス—

A Basic Study on Ohya Area #4
: Development Process as a Tourism Area

渡 邊 瑛 季 (宇都宮共和大学 専任講師)

本稿では、宇都宮市の大谷における観光の発展過程を、文献資料をもとに通時的に説明する。近世以前から、大谷寺や大谷石が形成した「奇岩」と呼ばれる独特な地質景観は、観光者をひきつけていた。第二次世界大戦後には、飲食店、土産品店やスパ施設などが立地して観光者が増加し、マストურიズム型の観光地として発展した。1979年に大谷石の採石跡地を見学できる「大谷資料館」が開業し、採石空間が観光資源として認識された。1980年代末の陥没事故は観光の衰退を招いた。しかし、最近の大谷資料館の人気増大、現役の採石地を含む採石空間の積極的な観光活用、宇都宮市による大谷振興策は、大谷の観光を再生させつつある。さらに大谷は、「美食」を観光資源として取り込むことで、再発展を目指している。

キーワード: 観光, 観光振興, 採石, 大谷町, 宇都宮市

1 はじめに

宇都宮市西部に位置する城山地区の大谷町を中心とする地域（以下、「大谷」という）は、「大谷石」と呼ばれる岩石の採石地という性格をもつ一方で、大谷資料館などの観光施設やレストランなどが点在し、年間70万人以上の観光客（以下、「観光者」という）を集める宇都宮市有数の観光空間としての性格ももつ。本稿では、大谷における観光の発展プロセスを、文献資料をもとに通時的に説明する。その際、大谷への観光者数と観光関係施設の立地状況から4つの時期区分を設定した。

4つの時期区分は、文献や新聞資料から大谷の観光者数が大きく変化すると明確に認められる年を境に設定した。それは、平和観音の建立を機に観光開発が進展し観光者数が増加した1956年、陥没事故を機に観光者数が顕著な減少傾向に転じた1989年、大谷資料館の人気増大や、宇都宮市の大谷振興策によって観光地として再整備が進み、観光者数が増加に転じた2013年である。したがって、本稿では、平和観音の建立直前の1955年までを「萌芽期」、平和観音が建立された1956年から1988年までを「発展期」、陥没事故があった1989年から2012年までを「衰退期」、

2013年の大谷資料館の営業再開から現在までを「再生期」とした。

2 萌芽期（1955年まで）

大谷には、国の特別史跡、重要文化財、名勝の3つに同時指定されている10体の大谷磨崖仏がある。これらは、日本最古の磨崖仏とされ、このうち千手観音菩薩立像は天開山大谷寺¹⁾の本尊である。磨崖仏は810（弘仁1）年に弘法大師（空海）によって建立されたという寺伝が存在する。鎌倉時代に大谷寺は坂東三十三観音霊場の第十九番札所となり、霊場として巡礼者を集めるようになった。江戸時代後期には、『坂東三十三所観音霊場記』や『日光驛程見聞雑記』などで紹介されたことで信仰や観光の場として広く知られるようになった（井上，2015）。

明治時代には、姿川西岸の山本山に「大谷遊楽園」が開園し、庭園やあずまや、茶店などが設けられ、山を階段で上って大谷の眺望を楽しむことができた（宇都宮商工会議所，2012）。また、「盤水館」など観光者向けの旅館も建設された（井上，2015）。第二次世界大戦以前から4軒の旅館が立地しており、そのうち2軒は割烹旅館として機能していた。これらの旅館は、大谷寺への巡礼者の宿泊と地元の石材業者の商売²⁾や宴会のために利用されていた（栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ，1974）。

このように、第二次世界大戦以前から、大谷石が形成した「奇岩」と呼ばれる独特な地質景観は、多くの観光者をひきつけていた。

3 発展期（1956年から1988年まで）

3.1 平和観音の建立を契機とした観光地化

発展期開始の契機となるのは、1956年4月5日に建立・開眼供養された大谷石製の平和観音である。平和観音は、太平洋戦争での戦没者の供養と世界平和を祈念する目的で、大谷の石工であった上野波造が制作を開始した。制作過程で東京芸術大学教授の飛田朝次郎の指導を仰ぎ、また大谷の石工の力を借りながら、1948年9月から1952年12月にかけて制作された（栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ，1974）。平和観音は、大谷寺の至近の採石場跡地を利用して総手彫りによって彫刻され、高さは26.93 m、胴回り20 m、顔の長さ5 m、鼻の長さ1 m、足の指1.5 m、足の親指の長さ0.75 mにも達する巨大な石像である。平和観音が建立する場所は、1956年に大谷公園として整備され、小学校の遠足の目的地としても賑わった（阿部ほか，2010）。平和観音は、制作目的であった平和祈念の場というよりもむしろ大谷の新たな観光名所として認識されるようになったために、平和観音の建立を契機として、土産物店兼レストランやドライブインがその周辺に多数立地した（栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ，1974）。

1957年6月には、それまでの手掘りに代わって、機械（チェーンソー）による大谷石の採石方法が実用化された（小林，1980）。これによって、大谷石を大量に採石することが可能になった。また、高度経済成長に伴う宅地や石塀の建設需要の増加によって、大谷石の需要が増加したため、大谷石の価格は1950年代後半に2倍以上になった（小林，1980）。以上から、大谷石の採石産業は1950年代後半に空前の好景気を迎えた。

この好景気と1956年の平和観音の建立に伴う観光者の増加を背景として、関東自動車など地元資本が中心となって「宇都宮ヘルスセンター」が1958年に建設された（阿部ほか，2010）。建物は屋上付きの木造地上2階建てで、大浴場、ステージショーを楽しめる200畳の広さの大宴会場、遊具が設置された。このような施設が建設されたのは、1955年に千葉県船橋市に開業した「船橋ヘルスセンター」が盛況で、これをモデルとしたためとされる（うつのみやシティガイド協会，2014）。宇都宮ヘルスセンターは、平和観音とともに大谷観光の目玉となり、観光者だけでなく、大谷の石材業者や宇都宮市民の憩いの場としても広く利用された（阿部ほか，2010）。ショーの中には、「大谷小唄」という大谷オリジナルの曲をかけた踊りもあった（うつのみやシティガイド協会，2014）。昭和30年代には、宇都宮ヘルスセンターと同様に浴場と宴会場を備えた「山本園大谷グランドセンター」という観光施設も大谷に建設されたが、現在では廃墟となっている。また、当時流行したスケート場も設置されていた（井上，2015）。

3.2 マスツーリズム型観光地としての発展

このような観光対象の増加は、大谷を訪問する観光者数の増加に寄与し、平和観音の境内には1967年に128万人、1972年に142万人が来訪した。この時期には、大谷寺への信仰者よりも、修学旅行や団体観光者が顕著にみられるようになった。平和観音の境内への来訪者数を月別にみると、1970年代初期には、10月が特に多く約20万人が来訪しており、また5月、6月にも16～19万人が来訪した。一方で、1月、12月を中心に冬季は観光者数が少ない傾向にある。観光者は関東地方を中心に全国各地から来訪し、日光や鬼怒川温泉を主たる目的地としながら、移動の途中で立ち寄るといった特徴をもっていた（栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ，1974）。

1973年8月の栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブによる調査によれば、大谷寺・平和観音周辺には、土産物店が8店、ドライブインが2店、石細工店が1店立地していた。当時の代表的な土産物は、大谷石製の石細工、栃木県特産のカンピョウであり、その他にはたまり漬、植木（サツキ、岩松）、益子焼などが販売されていた。石細工は1個数百円から2千円程度で、雪見灯籠、木の根灯籠、カエルやタヌキの置物などさまざまであった。カエルの置物は現在でも大谷で土産物として多数販売されている。レストランでは、マツタケご飯、シメジご飯などキノコを利用した料理が名物として提供され、店舗の看板にも「名物 松茸めし」などと大きく掲げられていた。キノコが料理に使用されたのは、地元特産³⁾であるためとされているが、マツタケは愛知県から入手していた店舗もあった。旅館については、第二次世界大戦前から4軒が立地しており、収容定員は20～60人、部屋数が8～17であり、大谷への観光や石材業者への商売²⁾を目的として、年間で約1万5千人が宿泊していた。

以上のように、大谷は日光方面への訪問を主目的とする観光者が来訪するマスツーリズム型の観光地として1950年代後半から発展してきた。

3.3 大谷資料館の開業

1979年には大谷石の坑内掘りの跡地を見学できる民間施設である「大谷資料館」が開業した。

これは、現在でも大谷観光の中核的な施設となっている。大谷資料館がある場所は、1919（大正8）年から採石がはじまったため、手掘りと機械掘りの二通りの採石方法がわかる切り出し跡が残っている。1979年の開業時から1986年までは採石を続けながら観光者を受け入れていた。

大谷資料館が開業した経緯は、文献からは管見の限り不明である。しかしながら、大谷石の採石量が1973年に89万トンとピークに達し、オイルショック以後の大規模宅地造成における擁壁需要が減少していったことで採石業者の収入も減少したこと、また多くの観光者が大谷に来訪していたことから、採石業者が採石跡地を観光施設として転用し、新たな収益源として観光事業を始めたと推測する。大谷資料館の開業は、現役の採石地また採石跡地が観光資源と住民に認識されたことを示している。すなわち、大谷固有の産業である採石業が営まれる採石空間そのものが観光資源化されたのである。

大谷資料館は映画やテレビドラマ、ミュージックプロモーションビデオなどの撮影、またコンサートや劇場としても利用されている。1981年に映画「セーラー服と機関銃」の撮影で使用され、十字架に縛り付けられた薬師丸ひろ子のシーンなどが撮影された。これ以外にも毎年多数の撮影やコンサート、イベントで使用されている。撮影の実績も大谷資料館内で写真とともに展示されている。

4 衰退期（1989年から2012年まで）

4.1 陥没事故の発生と観光への影響

1989年と1990年には陥没事故が発生し、当時全国に報道された。陥没事故によって大谷石の採石やその廃坑は安全性が懸念され、採石業者が減少した結果、大谷石の出荷量は1980年代の40万トン前後から、1990年代前半には20万トン台にまで減少した（岩村ほか、2019a）。採石業者の減少によって、大谷における労働者数も減少し、飲食店などの撤退がみられた（岩村ほか、2019b）。

観光者数は1980年代まで100～110万人台後半を推移していたが、1989年の陥没事故で急減し、1990年代中盤まで50～60万人台を推移していた（図1）。1998年からは観光者数が毎年数万人以上の単位で減少し始め、廃業する飲食店や宿泊施設もみられた。この要因は文献からは明らかにできなかったものの、バブル崩壊後の全国的な観光需要の縮小に加え、日光や鬼怒川温泉への

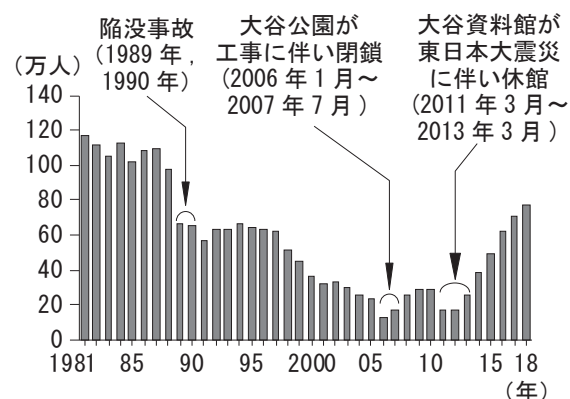


図1 大谷への観光入込客数の推移と観光入込客数減少の背景（1981～2018年）

（宇都宮市観光交流課資料，栃木県観光客入込数・宿泊数推定調査結果から作成）

来訪者が減少したことで、その立ち寄り観光地として機能していた大谷にも観光者数の減少が及んだと推測する。

陥没事故が廃坑で起きたことから、廃坑は「危険」であり、また1960～70年代に隆盛を極めた大谷石採石業の「負の遺産」とも住民によってみなされるようになった（岩村ほか，2019b）。このことは、採石空間に対する観光資源としての認識が住民の間で薄くなっていったことを示している。

4.2 東日本大震災の追い打ち

2004年に国は宇都宮市から提出された地域再生計画である「大谷地域文化観光再生計画」を認定した。これは、①文化芸術による創造のまち支援事業、②エコツーリズムに対する支援、③案内標識に関するガイドラインの策定の3つのプログラムから成っていた（飯村，2004）。その一方で、2006年1月から2007年7月に大谷公園は工事に伴って閉鎖された。そのため、2006年の観光者数は12万4,154人となり、1981年以降では最少となった。その後、観光者数が増加傾向を示した矢先の2011年3月に東日本大震災が発生した。大谷資料館には直接的な被害こそなかったものの、観光者が抱く不安を懸念し（岩村ほか，2019c）、2013年3月まで休館した。衰退期においても、「フェスタ in 大谷」（2000年開始）、「大谷石夢あかり祭」（2007年開始）など現在も続くイベントが地元の手で開催されたものの、観光者数の大きな回復には至らず、2010年代初頭には年20万人前後で停滞した。

5 再生期（2013年から現在）

5.1 大谷資料館の人気増大

2013年4月に大谷資料館が営業を再開すると、大谷への観光者数も増加した。営業再開を機に、大谷資料館では、それまで禁止していた館内の写真撮影を許可した。これによってTwitterなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などに館内の神秘的な写真が投稿、拡散され、さらに多くの観光者が来訪するようになった。その結果、2013年に8万人であった来館者数は、2018年に46万7千人に急増した（岩村ほか，2019c）。

5.2 宇都宮市による大谷の観光振興策

大谷資料館の営業再開を受け、宇都宮市は、主要鉄道駅からの二次交通の確保と周遊の促進を目的に、路線バスを運行する関東自動車と共同で「大谷一日観光乗車券」を作成し、2014年7月から販売を開始した。これは、JR宇都宮駅から大谷間の路線バスの一日乗車券と大谷資料館、大谷寺の入場券を合わせた特別企画券であり、大人1,850円（2020年3月時点）で販売されている。2019年3月末までに47,880枚が販売された⁴⁾。

2016年11月の宇都宮市長選挙で再選した佐藤栄一氏は、大谷の観光活性化を市主導で実現することを公約に掲げ、レストランやカフェなどの飲食店整備や周遊バスの充実の考えを示していた（五月女，2016）。2017年度から宇都宮市は経済部都市魅力創造課内に大谷振興室を設置し、

2018年3月には都市計画課と共同で「大谷地域振興方針」を策定した。この方針は、おおむね10年後（2028年）を目標として、1) 地域資源の最大限の有効活用、2) 地域振興の基軸となる「観光」を支える機能の充実、3) 持続可能な地域振興の推進の3点によって、大谷の観光や諸産業の活性化を達成するとともに、年間の観光者数を120万人にすることを掲げている。また、民間事業者によるレストランやカフェなどの出店を促進するために、観光資源が集中する大谷寺周辺における開発許可基準を2018年度から緩和するとともに、建物用途、立地誘導範囲、敷地・延床面積などの基準を明確化した。

さらに宇都宮市は、大谷振興室と文化課が共同で、文化庁が2015年から展開している「日本遺産」に「大谷石文化」を申請し、2018年5月に「地下迷宮の秘密を探る旅～大谷石文化が息づくまち宇都宮～」が認定された。長い歴史を持つ大谷石の採石文化や石をつかいこなす文化が、大谷だけでなく、宇都宮市内に多数ある大谷石造の建築物などにも表れていることをストーリー化した。日本遺産申請にあたって、2018年には文化財保護行政を進めるための「宇都宮市歴史文化基本構想」も策定された。

5.3 「美食」を提供する飲食店の新規出店

宇都宮市による観光振興策もあって、大谷街道沿いに飲食店の開業が、2018年以降相次いでいる（表1）。これらの店舗の特徴は、元の建物をリノベーションして使用している点、いずれも建物や敷地内に大谷石を使用している点、また、飲食店では1食数千円以上する価格設定で、やや高級志向であったり、オーナーのこだわりが反映されたメニューであったりする点にある。例えば、2018年4月に、商業施設開発のコンサルティングを手掛ける宇都宮市のカルチャーバンクスタジオという企業は、ベーカリー兼洋食レストランの「THE STANDARD BAKERS 大谷本店」を大谷街道から平和観音に続く参道沿いに開業した。これは、1990年代末頃まで「大谷レストハウス」として利用されていた2階建ての建物を、開業にあたって全面改修したものである（鈴木、2017）。ベーカリーはフレンチの名門ジョエル・ロブションなどで修行した氏家由二氏、レストランは宇都宮市出身のフレンチシェフである音羽和紀氏が監修しており、ランチは1,000円台、ディナーコースは4,000円である。また、2018年4月にはレストラン兼カフェの「OHYA FUN TABLE」が開業した。料理には霧降高原牛やみや美豚、那須の森のチーズなど栃木県産の食材を使用しているのが特徴で、ランチセットは1,000円台後半～2,000円台で提供されている。

表1 大谷における最近の飲食店の立地状況

No	店舗名	業種	開業時期	以前の利用状況
1	OYA MUSEUM ROCKSIDE MARKET	土産物店、カフェ	2016年4月	大谷ミュージアム（土産物店）
2	THE STANDARD BAKERS 大谷本店	パン店、洋食レストラン	2018年4月	空き店舗（大谷レストハウス）
3	OHYA FUN TABLE	レストラン、カフェ	2018年4月	空き店舗（レストラン盤石）
4	Punto-大谷町食堂-	イタリアンレストラン	2020年3月	ガソリンスタンド
5	ISLAND STONE COFFEE ROASTERS	カフェ	2020年3月	個人商店

（現地調査、各施設公式ウェブサイト、ブログ「とち、フラ～」⁵⁾から作成）

5.4 採石空間の観光活用

宇都宮市にある株式会社ビルスタジオで建築設計などを手掛ける塩田大成氏は、大谷に約250あるとされる「廃坑」と呼ばれる採石跡地の活用策を模索する中で、採石跡地の地下に水がたまった空間にゴムボートを浮かべた様子を2012年にSNSで発信した。このアイデアに呼応した栃木県内のアウトドアレジャー事業者や道の駅ろまんちっく村うつのみやなどを運営する株式会社ファーマーズ・フォレストの松本謙社長を加え、有限責任事業組合（LLP）チイキカチ計画を発足させ、ゴムボートによる観光ツアーの事業化に着手した。2年間の調査期間を経て2014年に「OHYA UNDERGROUND」の名で事業化した（坂内, 2019）。大谷の散策と合わせ1人8,500円のツアーであるが、予約が数カ月先まで取れない場合もあるほど人気を集めている。

大谷石の採石・販売業のKANEHONは、露天掘りと呼ばれる屋外での深さ30mにも及ぶ大谷石の現役の採石現場を2019年4月から一般向けに公開し始めた。公開されている曜日は限定されているものの、うつのみやシティガイド協会の案内で、約40分、1人500円で見学することが可能である。採石現場はテレビ番組の撮影などで使用されたことはあるものの、一般には公開していなかった。しかし、2018年5月に日本遺産の構成文化財に認定され、見学の要望があったこと、大谷を好きになってもらいたいという社長の意向から、公開が実現した（伊藤, 2019）。

表2 大谷における観光関係の主な出来事

時期	年	出来事
萌芽期	明治期	庭園「大谷遊楽園」、旅館「盤水館」の建設
発展期	1956	平和観音建立、大谷公園開園
	1958	宇都宮ヘルスセンター開業
	昭和30年代	山本園大谷グランドセンター開業
	1967	観光者数128万人
	1972	観光者数142万人
	1979	大谷資料館開業
	1981	大谷資料館で映画「セーラー服と機関銃」撮影
衰退期	1981	観光者数116万人
	1989	陥没事故
	1990	陥没事故
	1993	大谷資料館の教会利用開始
	2000	「フェスタ in 大谷」開始
	2006	観光者数12万人（大谷公園工事で通年閉鎖）
再生期	2007	「大谷石夢あかり祭」開始
	2011年3月～2013年3月	東日本大震災に伴い、大谷資料館休館
	2014	「大谷一日観光乗車券」発売（大人1,750円）
	2014	地底湖クルージング開始
	2016	うつのみやシティガイド協会の観光案内所再設置
	2017	宇都宮市都市魅力創造課に大谷振興室設置
	2018	宇都宮市「大谷地域振興方針」策定
	2018	日本遺産「大谷石文化」認定
2021	音羽和紀氏によるオトワレストラン出店予定	
2022	大谷スマートインターチェンジ開通予定	

（本稿の2章から5章で引用した各参考文献から作成）

また、大谷景観公園の西隣にある採石跡地の稲荷山では、アーティストのコンサートやコスプレの撮影会が行なわれるようになった。稲荷山は特撮番組やプロモーションビデオの撮影には利用されたきたものの、私有地であり一般には公開されてこなかった。2019年3月には野外音楽フェス「OYA WONDER DISCO2019」が開かれた（鈴木，2019）。当日は約2,000人が来訪し、9組のアーティストのライブを楽しんだ。さらに、大谷出身の女性が宇都宮市を拠点とする「miyacos」というコスプレイベント運営団体を主宰し、稲荷山や大谷資料館、廃墟となった旧山本園大谷グランドセンターなどで2015年からコスプレ撮影会を開催している。大谷石の採石跡地や廃墟は、独特な雰囲気や他の地域にはみられないことから、背景にこだわるコスプレイヤーにとって魅力的な撮影地となっている（渡邊，2019）。

また、2018年に利用開始となった「ishikiri terrace」は、大谷石の加工場をフリースペースとして地元建築家などが再整備したもので、大谷石採石業の名残を活かした空間となっている。

以上のように、再生期においては採石業者、またアーティストや建築家などの宇都宮市に住むクリエイティブな主体が、現役の採石地や数多くの「廃坑」を活用する取り組みを活発に行うようになった。これによって、陥没事故以降、大谷の住民が観光資源ではないとみなしてきた採石空間が積極的に観光活用されるようになった。また、やや高価格帯の美食レストランやカフェなど食という魅力も大谷に加わった。表2は、2～5章で示した大谷における観光関係の主な出来事である。

6 おわりに

これまでの大谷を対象とした研究は、大谷石産業や文化財に関するものがほとんどであり、本稿では大谷の観光発展史を示すことができた。大谷の観光の発展は、採石空間の観光活用と深く関係している。第二次世界大戦後に採石とは直接関係のないレジャー施設の立地が大谷の観光発

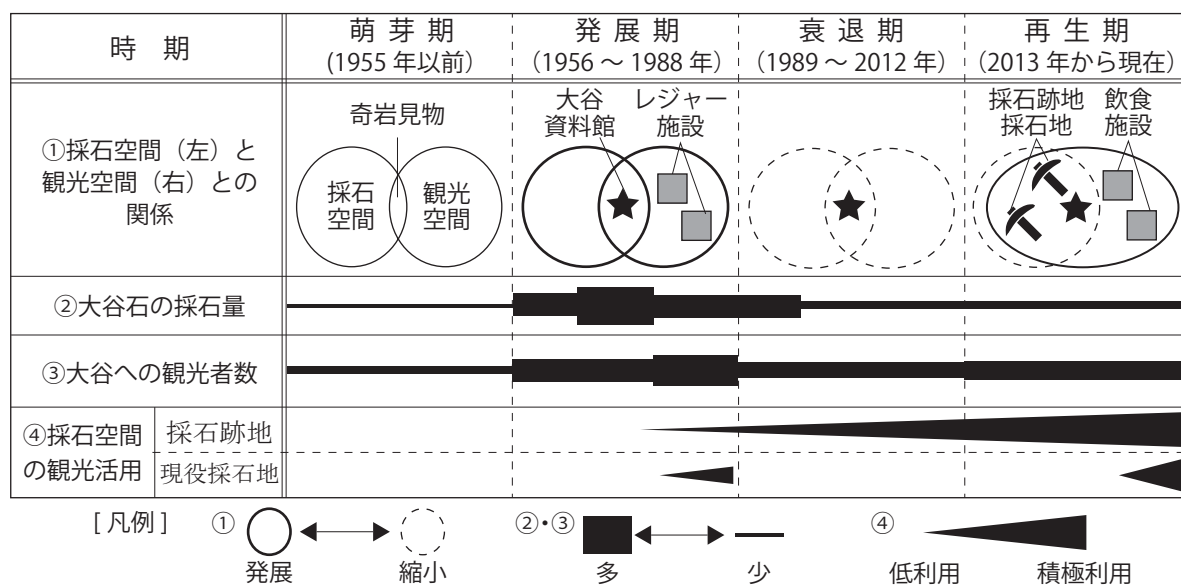


図2 大谷の観光発展プロセス

(筆者作成)

展に寄与したこともあったが、それ以外の時期においては、採石空間を観光資源として積極的に利用している時期が、大谷の観光が発展した時期と重なる（図2）。それゆえ、大谷の真正性が、固有の産業である採石業にあるとすれば、採石空間を観光にいかにつなげていくかが今後の発展の鍵となるだろう。2021年には高級フレンチを手掛ける音羽和紀氏によるオトワレストランが出店予定であり、美食を目的とした観光がさらに強化される。その際に、採石跡地での美食堪能は案として考えられる。

筆者の専門分野である観光地理学においては、先進国におけるマスツーリズム型観光地の再生過程やその要因はほとんど明らかになっていない。そのため、今後、大谷における最近の観光開発による再発展要因を検討することで、観光地の再生に関する知見を得ることもできよう。

【注】

- 1) 時期については不明であるが、坂東三十三観音霊場は関東地方の霊場群であることもあり、大谷寺の信仰者は主に関西地方から来訪していた（栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ、1974）。
- 2) 栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ（1974）には、旅館への宿泊目的について「この町の旅館の利用は、観光のためと石屋さんの商売のために泊まる」とあり、この「商売」が大谷への出張者のことなのか、石材業者による取引先への営業や接待なのかは説明がなく不明である。
- 3) 大谷寺の裏側にある御止山（おとめやま）は、「日光御用の山」と呼ばれ、輪王寺宮が毎年秋にマツタケ狩りを行うため、住民の入山を許可していなかった。このことから「御止山」の名がついた（宇都宮商工会議所、2012；埴、2015）。
- 4) 関東自動車株式会社「路線バス企画乗車券 大谷観光一日乗車券について」<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/soukou/soukou-magazine/1906kantou.pdf>（2020年3月24日閲覧）。
- 5) ブログ「とち、フラ〜」<https://pool330.blog.fc2.com/>（2020年3月24日閲覧）。

【参考文献・資料】

- [1] 阿部宏美・五十嵐幸子・石井敏夫・井上俊邦・川村泰一・坂本 明・桜井 実・鈴木一志・塚越哲男・中神秀夫・増渕 昭・和氣紀夫（2010）『保存版 宇都宮今昔写真帖』郷土出版社。
- [2] 飯村 淳（2004）観光都市・大谷の再生をめざして～産学官民連携と特区の活用で再生を～。那須大学都市経済研究年報，4，165-175。
- [3] 伊藤一之（2019）大谷石露天掘り 絶景公開。下野新聞 2019年4月23日24面。
- [4] 井上俊邦（2015）石の里 大谷 人々と石との係わり。橋本優子編『大谷石をめぐる連続美術講座論集 大谷石の来し方と行方』宇都宮美術館，4-7。
- [5] 岩村由紀乃・藤田りか・稲葉雄大（2019a）大谷は今 大陥没事故30年 3 生き残りへ用途拡大。下野新聞 2019年2月17日付3面。
- [6] 岩村由紀乃・藤田りか・稲葉雄大（2019b）大谷は今 大陥没事故30年 5 「負の遺産」を活用。

- 下野新聞 2019 年 2 月 19 日付 3 面.
- [7] 岩村由紀乃・藤田りか・稲葉雄大 (2019c) 大谷は今 大陥没事故 30 年 4 神秘的地下 再興けん引. 下野新聞 2019 年 2 月 18 日付 3 面.
- [8] うつのみやシティガイド協会 (2014) 『なるほど The 大谷』うつのみやシティガイド協会.
- [9] 宇都宮商工会議所 (2012) 大谷遊楽園と御止山. 『宇都宮商工会議所会報 天地人』2012 年 2 月号.
- [10] 小林博彦 (1980) 大谷石材. 宇都宮市史編さん委員会編『宇都宮市史 近・現代編 I』宇都宮市, 763-924.
- [11] 坂内剛至 (2019) 【OHYA UNDERGROUND の取り組み】採石場跡地の新たな活用. 大谷石 (NPO 法人大谷石研究会会報), 27, 2.
- [12] 鈴木久崇 (2017) 大谷観光 始点に飲食店 魅力発信へ来春オープン. 下野新聞 2017 年 11 月 11 日 11 面.
- [13] 鈴木久崇 (2019) 大谷で初 野外音楽フェス 非公開採石跡に歌手 9 組. 下野新聞 2019 年 2 月 1 日 4 面.
- [14] 五月女裕美 (2016) 宇都宮市長選「大谷観光、市主導で」佐藤氏、公約に 5 本柱. 下野新聞 2016 年 9 月 27 日 1 面.
- [15] 栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ (1974) 『地域総合調査報告 大谷』栃木県立宇都宮中央女子高社会クラブ.
- [16] 塙 静夫 (2015) 『うつのみやの地名と歴史散歩』下野新聞社.
- [17] 渡邊瑛季 (2019) 宇都宮市北西部における地域資源の観光活用方策に関する調査研究. 市政研究うつのみや, 15, 59-68.